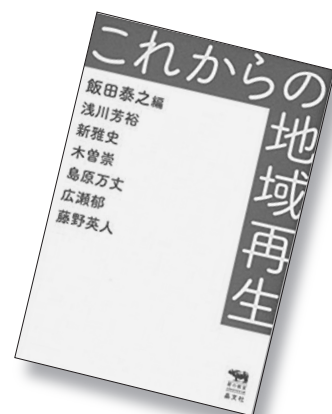


読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 山本敏也



『これからの地域再生』

●飯田泰之 編 晶文社 1,600円+税

本書は、まず地域の定義から始まるので、読み進める上でイメージが容易です。本書のいう地域は、中心地の人口が10万人以上で、周辺人口が20万人以上の都市を指しています。

クリエイティブ都市論を引き合いに、都市の活力はそこに住む人々の才能によってもたらされるのであれば、都市の住みやすさが地域活性化を考える上で重要になる、と本書は主張します。また、メディアでもよく紹介される「住みよさランキング」について、その評価基準が同調査の開始された時代背景を反映した、量的評価であることを指摘し、センシユアス・シティという新たな「物差し」を提案しています。

「国土の均衡ある発展」という名の下で行われた、1962年の全国総合開発計画（全総）に端を発する、大規模な国土開発の功罪について書かれた第2章では、とりわけ、製造業の空洞化が進んでいたにもかかわらず、開発が続けられた理由の1つとして、対米貿易摩擦解消のための、日米構造協議に基づく内需拡大や流通分野の規制緩和などを挙げています。

なお、本書は共著ではありますが、日米構造協議の最終報告を受けて流通業が規制緩和され、商店街の衰退を招いた点など、問題意識にブレがなく、本書全体をスムーズに読むことができます。

遊休不動産や建物の利活用、すなわち再生については、稼働率で空間の経営を評価する方法を提示しています。そのほか、人口減少の下で再開発や公共空間の整備を通じて、にぎわいを創出しようとする行政と、そこに魅力やリスクを取るほどのポテンシャルを感じない経済活動の担い手とのギャップにも言及しています。

わが国でも近年、都市政策としてその振興が話題になりつつあるナイトタイムエコノミー（夜間

経済）について、川崎市で1997年に始まった「カワサキハロウィン」の例が紹介されています。民間企業が始めた私的なイベントが、現在は地元の商店街組織や複合商業施設、市役所、町内会などで構成される同プロジェクトの主催となり、来場者約12万人、仮装参加者約2,500人を集める日本最大規模のパレードです。こうしたナイトタイムエコノミーの具体例を示すことで、行政・民間それぞれの立場からその効果などを検討する際に、大いに役立つでしょう。

地方都市の地域再生の多くが、補助金行政の域を出ていない理由として、地域再生の担い手が正しいリスクの取り方を知らない「エリート層」にあると第5章の著者は断言します。地方や郊外に住むマイルドヤンキーの雇用の受け皿となっている、地元の地盤を活かして事業展開する事業家を「ヤンキーの虎」と名付け、彼らが地域再生の鍵を握るとの分析は、なかなか斬新です。

以上、大まかに流れを紹介しましたが、色々な分野の専門家がユニークな角度で地域再生を論じており、飽きさせない構成になっています。欲を言えば、各章のボリュームが、テーマについてもう少し詳しく知りたいと感じる程度に抑えられていることでしょうか。とはいえ、やや食傷気味な最近の地方創生・地域再生に、一石を投じるような内容で、一読をお勧めします。

【編者略歴】

明治大学政治経済学部准教授。1975年東京都生まれ。2000年、東京大学大学院経済学研究科修士課程修了、駒澤大学経済学部専任講師、准教授を経て、2013年より現職。主な著書に『経済学思考の技術』（ダイヤモンド社）、『思考の「型」を身につけよう』（朝日新聞出版）ほか。